二次元ぷち文庫

エルフプリンセス
Elf Princess

深緑の護り姫

筆祭競介
表紙イラスト：ひなくま

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『エルフプリンセス　深緑の護り姫』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

筆祭競介
表紙／ひなくま

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

エクリシア
神聖なるワームリットの森を守護するエルフの姫。魔術により気象を操ることができる。

グルド
ワームリットの森を奪おうとする欲深い新任領主。

そこは鬱蒼とした森だった。樹齢数百年を思わせる見事な樹木が立ち並び、その太い幹には無数の蔦が絡みついている。根元付近に目を向ければ無数の苔や茸が生えていて、大小様々な植物が複雑に絡みあって共存していた。何より地面にまで届く木洩れの陽の少なさが、その深緑の豊かさを雄弁に物語っている。

そんな見事な森の前に広がる平原で、二つの勢力が対峙していた。

森の入り口で弓を手にして立っている者たちの人数は約二十人。みな若い男で長身、スマートな身体つきをしている。特筆するべき点は耳で、全員のそれが上に向かって長く尖っていた。彼らはこの深緑の地――ワームリットの森に暮らすエルフたちである。

そして森に面する平原で彼らと対面しているのは、二百人を超える人間だった。その大半が粗末な麻布の服を着て、鍬などの農耕道具を武器代わりに持っている。彼らはこの森の近くに暮らす村の住民たちである。ほぼ全員が農業を生業としていた。しかし、その集団の最後方に、立派な甲冑に身を包んだ者たちが十人ほど馬に乗っている。

「何をしておるか」

中でも一番豪華な甲冑に身を包み、見事な白馬に跨がる肥満体型の中年男がいらつきの滲む声で呟いた。彼の名前はグルド。この地の領主に一年ほど前に任命されたばかりの男である。そのセリフを聞いた取巻きたちが前進を止めた村人たちに向かって叫ぶ。

「何をグズグスしているっ！　さっさと進め！　進まぬかあっ！」

抜き身の剣を大きく振り強引に前進を促すが、村人たちの足は進まない。
「だ、だども……」
「……これ以上は」
「エルフ様たちが……」
村人たちは困ったようにお互いの顔を見合わせ、そして改めて視線を前に向けた。
エルフ族の男たちが行くてを遮るようにして立っている。自分たちを数倍も上回る人数と対面しているにもかかわらず、彼らの表情には脅えの色は微塵もない。誇り高い彼らはどんな大敵と対峙しても、自分たちの里を守る決意に揺るぎはなかった。
「ええいっ、いまいましい！」
甲冑の男の一人がおもむろに弓を引き、森の住人たちに向けて矢を放った。と、その直後――。
ビュンっ、ビュビュビュンッ！
エルフたち数人が目にも止まらぬ速さで弓を引き、矢を放つ。
ビシッ！　ビシシッ！
先制した男の腕にエルフたちの矢が全てが的確に命中する。甲冑を着ているので生身の腕に突き刺さりこそしなかったが、その衝撃は凄まじく男の腕から弓を弾き飛ばした。これだけの距離があるというのに信じ難い精度であり、力である。

「ぬううっ！　お、おのれええっ！　進めっ！　奴らを皆殺しにしろっ！」

弓を弾かれた男は顔を真っ赤にして怒鳴った。剣をエルフたちに向けて何度も振り、村民たちの前進を強引に促す。それでも動かない男たちを見て、とうとうその剣先は味方である村人たちに向かいはじめた。

「戦えっ！　戦わぬのであれば、お前らをワシが殺してやるわっ！」

無茶苦茶な命令に村人たちも前に進まざるをえなくなる。

迫り来る人間の集団を前にして、エルフたちにも緊迫感が走る。睨みあっていた距離が半分まで狭まった時、やむをえず森の住民たちは弓に矢をつがえはじめた。それを見た領主の取巻きである甲冑の男たちだけは前進をやめ、その場で村民たちに進め、進めと命令し続ける。結局、グルドとその部下たちは集団の最後方に位置することになった。

エルフ族の男たちと村人たち――普段から多少の親交もある二つの勢力がまさに衝突しようとしている。――そんな時だった。

「止まりなさいっ！」

深緑の森の入り口に凛とした声が響き渡った。その声を聞いた村民たちがピタリと前進をやめ、弓を引いていたエルフたちもその矢先を下に向ける。全員が声のしたほうに視線を向けた。

そこには一人の歳若い女が立っていた。

腰まである紫色のストレートヘアと、上向きに長く尖った優美な耳が、彼女がエルフであることを示している。そのアーモンド型をした切れ長の碧眼は力強く、凛とした輝きはその場にいるどの男よりも力強かった。ほっそりとした頬のラインや細い顎、高く整った鼻先など、その美貌はシャープに洗練されている。王都にいる人間の貴婦人たちですら、この美貌と比べれば泥臭く思えてしまうほどだ。それもそのはずで、彼女はこのワームリットの長であるエルフ王の娘――つまりはエルフのプリンセスだった。

そんなドレスを着ればどれほどの名華になるや、という容姿にもかかわらずこの姫様は男装に近い恰好をしていた。グリーンの上着に鞣革製の胸当てを付け、長い両足はスカートではなく猟師が穿くような活動的なズボンに包んでいる。しかし、その尋常ではないプロポーションは隠しようがなく、胸当ての内側の豊かな盛り上がりや、女らしい腰のくびれは容易に服の上からうかがえた。

「おおっ、エクリシア様っ……」「エクリシア様だ」「へへっー」

村人たちは手に持っていた武器代わりの農具を手放し、その場に雪崩をうつように跪きはじめた。まるで現世に神でも現れたような光景だ。ただ誰もがそれを納得してしまうほど、その女――エクリシアは美しく、そして神々しくさえあった。

※

エクリシアは二つの対峙した勢力に、その碧眼を向けた。

水不足で困っているという近隣の森に、雨乞いの魔法をして欲しいと依頼され、その仕事を終えた帰りである。自分が不在の間に、何やら不穏なことが起こったようだ。

「これは何事ですか！」

エルフ姫はまず部下である森の男たちに問うた。現在、高齢の父――ワームリット王は病床に臥せっているため、実質的なこの森のトップは一人娘の自分である。

「無事にお戻りいただき喜ばしい限りです、エクリシア様」

自分の留守を任せていた男が一歩前に出て、片膝を地面につけ頭を垂れた。

「挨拶は結構です。事の次第を述べなさい」

姫の言葉に男は、ハッ、と短く頷き言葉を続ける。

「人間たちが我等の森を無断で伐採しにきたのです。我々は森の木々を守るため、仕方なく弓を取りました」

その言葉を聞いてエクリシアの視線は今度は人間たちに向けられる。

「今の話は本当ですか？」

相手は部下ではないので、鋭い口調ではなかったが、凛とした声の響きに変わりはない。その問に見覚えのある人間たち――近隣の村の男たちがざわめく。

「は、はい。……あの、オラたちも無理矢理つれてこられて――」

村の男たちがここに至った経緯を、一人一人がバラバラに口にしはじめた。エクリシア

「そんなにされたら、どーだってんだ。あん」
「イッちゃうのか？　エルフのお姫様がこんなにたくさん人間の見てる前で」
左右の男はそれだけ言うと、エクリシアの耳にしゃぶりついてきた。耳の上に伸びた部分を舐め回されるとうなじの辺りがゾクゾクと官能に震えた。
「くっ、そんな所まで……この変態がっ……っはあああんっ……ふぁあっ……」
今までとは全く種類の違う快感に、脱力したような甘い喘ぎ声が漏れてしまう。
――くっ……ま、負けて……たまるかっ。
エクリシアはグッと下唇を噛み締めた。このままでは続けざまに屈辱の喘ぎ声が漏れてしまいそうだ。そんな彼女を苛むのは、全身で渦巻く肉悦だけでなかった。
「エルフってのは、耳まで感じるみたいだな。今までで一番反応がいいぜ」
「耳オナニーのやり過ぎで、こんなに耳がでかくなったんじゃねえか」
ネチネチした言葉責めに顔が赤らみ、精神が追い詰められる。男たちはエルフ姫の肉体だけではなく、気高く高潔な心までも辱めようとしていた。
「も、もう……いいだろう。……こ、これ以上は……はくうっ……」
「ああんっ？　本番は今からだろうが。オラっ！」
それまで耳を舐め回していた男たちが、耳の上に伸びた部分を咥え込んできた。そのまま強く吸いながら、舌と唇で激しくむしゃぶってくる。

ヒーロー文庫 えっち試し読み スタート！

「あああっ！　ダメッっ！　そこはダメぇえっっ！」

ビクン、びくくっびくびくっ。

全身で高まっていた肉悦が特別感度の高いエルフ耳を激しく責められ爆発した。一番顕著なのが両足で、膝がガクガクと激しく震え今にも崩れ落ちてしまいそうだ。過去に経験したことがない何かが全身で渦巻き、腰の辺りが内側から弾けそうになっている。

――こ、これが……イクって……感覚？

視界がやけにぼやけていると思ったら、いつのまにか愉悦の涙を流していた。

「感じまくって身体中ビクビクしてるのに、随分頑張るじゃねえか」

「さっきから尻の穴もヒクヒクしっぱなしだぜ。へへっ。ほれほれっ！」

「あっあああっ！　だ、だめっ！　そんな所に入ってっ……入ってくるなああっ！」

トドメが股間に顔を埋めている二人の責めだった。

熱い愛液が大量に溢れ続けている蜜壺に、男の舌が深く侵入している。自分ですら触れたことのない膣襞の一つ一つを選り分けるようにして、ねっとりと舐め回されている。今まで経験したことのない甘美な牝の快感が、股間から迸り全身に広がっていく。

アナルを責める舌はそれとは正反対だった。舌先に強く力を込めて執拗に硬く窄まった小穴に侵入しようとしている。あまりに激しい舌の動きに肛門の筋肉が耐えきれず、時折ぬぷぬぷと侵入を許してしまっていた。そのたびに鮮明な肉悦が背筋を駆け抜け、エクリ

シアを激しく喘がせる。

「だめえええっ！　何かがっなにかっあっあああっっっつっっっっ！」

子宮の内側で未知の何かが爆発しようとしている。この強烈すぎる快感の二重奏に、顎を真上に向けるように仰け反った。せめて声だけは漏らすまいと、下唇を噛みちぎりそうなほど強く噛む。

――イクっ！　いくううっいくううううっっっ！

自慰すら経験のないエクリシアにとってこれが初の絶頂だった。鮮烈すぎる官能の衝撃に意識が飲み込まれる。男たちに吸われっぱなしの乳首ははちきれそうなほど硬く充血し、執拗に穿られ続けたアナルが鼓動に合わせてビクビクときつく引き絞られた。処女にもかかわらず深く牡舌の侵入を許してしまっている蜜壺は、その壮絶な肉悦に屈し勢いよくプシュッッと潮を噴出させていた。

「おおっ。すげえイキっぷりっ」

「身体が引き締まってるから、痙攣の仕方が半端じゃねえな」

男たちはエクリシアが絶頂してもなお、舌と指の動きを止めなかった。イッたばかりで敏感な女体を続けざまに責められて、全身の痙攣が止まらない。皮の剥かれたクリトリスを舌先で包み込むように舐められ、膣内にはとうとう指まで入れられ掻きまわされる。そのあまりに気持ちよすぎる責めから逃げるため無意識に爪先立ちになっていた。しかしそ

んな僅かな距離の移動で男たちから逃げきれるはずもない。

「……っ……くっ……っはああっあっあっあっあああああっっっっ！」

とうとう噛み締め続けていた唇も限界に達し、気付いた時には大きく口を開け母音のみの絶叫を星空に向けて放っていた。あまりの快感に、頭の中が真っ白になり理性が吹き飛んでいる。爪先立ちの不安定な姿勢のまま、全身をビグビクと激しく痙攣させ、初めての絶頂感に浸りきる。

――ああ、すごく……きもちいい……。

そう考えた直後、姿勢を崩した。息んでいた全身から力が抜けて、膝から地面に崩れ落ちる。と、その直後――。

バチバチバチバチバチッ！

性的絶頂感に包まれていた全身に、激痛の稲妻が走った。エクリシアは条件反射的に慌てて立ち上がる。

「……あっ……くはあっ……」

しかし達したばかりの女体には力が入らず、膝がガクガクと震えてしまう。両腕を掴まれていなければ、こうやって立っているのも無理そうだ。

――今のが……この首輪にかけられた魔法？

自分がこのような状況に陥っているそもそもの理由を、皮肉にも痛みのために回復した

――ああっ、も、もう、だめぇっ……ほんとうに……もう……。

反撃をするどころか、これ以上立っていられない。しかしへたり込めばあの電撃地獄が待っている。エクリシアは自分の腰を掴んでいるグルドの手を掴んだ。そうやってなんとか姿勢を支える。

「ほほうっ。身体を一つにしたらワシが急に愛しくなってきたか。エルフの牝も、人間の女とかわらぬな。ほうれ、存分に可愛がってやるぞ」

ぐちゅぐちゅと湿った音を響かせながら、剛直した肉棒がゴリゴリと膣壁を擦っていく。愛するパートナーにしか許してはいけない領域で、敵の生殖器の硬さと熱さを味わわされエクリシアは髪を振り乱した。

「いやぁっ！　そんな深くまで、だめえええっっつっっ！」

身体の内側から直接官能を刺激され逆る快感は、身体の外側を複数の男たちによって責められても得られぬレベルのものだった。

じぷぐちゅぬちゅくくっ、ぐちゅぬぷぷっ。

初めて男を受け入れたばかりだというのに、膣襞たちは活発にうごめき大量の愛液を分泌しながら、敵のペニスを受け入れる。いや、だめ、と拒絶の言葉を連呼しながらも、その声はあからさまな官能の喘ぎ声だった。

――く、くうっ……な、なんで……。

エロシーン先読み　ここからスタート！

ワームリットの森を侵略しにきた憎き相手に処女を散らされた屈辱。しかし複数の男たちによって官能の味を覚え込まされた肉体は、そんな敵のペニスに貫かれても感じてしまう。喘いでしまう。心はこんなに苦しいのに、身体は壮絶な官能の真っ只中だった。

「ほうれっ。これがいいのであろうが。ほれっほうれっ！」

グルドの腰の動きはすぐに大きくなった。肉先でエクリシアの骨盤の裏側を擦るように腰を突き上げてくる。エルフ姫の小さく引き締まった小尻と、中年男のでっぷりと肥った下腹がぶつかりあうパンパンという音が、二百人以上の男たちが見守る広場に響き渡る。

「あんっあぁっ、あんっ、あんっ」

エクリシアの口からは、真後ろから迸る快感がそのまま音になって漏れているような、甘い喘ぎ声しか出なくなっていた。激しいグルドの突入に顎がガクガクと激しく躍り、膝の震えが止まらない。そのままへたり込まないように、掴んでいるグルドの両手を強く握り締める。

「ぐふふふっ。そんなにワシが愛しいか。それでは、ホレ――」

おもむろに首輪を後ろにグッと引かれた。ほとんど腰を直角に曲げていたエクリシアは必然的に上半身を起こされる。

「はぐううっ！」

膣内に埋まっている男根の当たり具合が変化し鋭く喘いだ。ヘソを裏側から貫かれそう

な圧迫感に、喉元にせり上がってくるような肉悦が迸る。初セックスの快感に全身が襲われ、意識が朦朧としはじめた。

「こっちを向いて舌を出せ」

もうよく頭が回らない。あまり意味も考えず命令に従った。口を開き、味覚器官をちろりと覗かせる。

「もっとだ。もっと一杯まで舌を出せ」

エクリシアは言われるまま、んはぁ、と舌を突き出した。

グルドはその舌にむしゃぶりついてきた。露出した部分を唇で包み込み、口内でエルフ姫の舌を舐めしゃぶる。舌を噛み切られた部下のことを考えてのディープキスなのだろう。しかし、もう今の自分にはその時のような気概はない。

「何をしておる。もっと自分から舌を絡ませよ」

立ちバックの体位で身体を繋げたままの窮屈な姿勢で舌を動かした。でっぷり肥った中年男は食べすぎで胃が悪いのか凄まじい口臭だった。その生臭い汚液のような唾液を味わうように、味覚器官をぬるぬると絡めあう。

「はうんんっ……くうっ……むちゅんんんっ……」

エクリシアは甘い溜め息を漏らしながら必死に相手の舌を舐めた。身の引き裂かれるような敗北感と、処女を失った喪失感から逃れるため、官能の世界に身を委ねる。

相手が完全に堕ちきっていると判断したのか、グルドから口を開き、こちらの口内に舌を入れてきた。んふーっんふーっと鼻息荒く舌を躍らせながら口内を貪られる。

ワームリットの護り姫、と謳われたエルフは、上下の口の最深部まで敵に侵入され犯された。

――はあんっ……きもちいい……。

相手の舌に動きを合わせねちっこく絡めあう行為の甘美さに陶然となる。膣内深くえぐり込んでいる肉棒によって子宮孔を突かれるたび、脳裏が官能で瞬き嫌な思いが消えていく。エクリシアは現実から逃避するため、セックスがもたらす快感に溺れはじめていた。積極的にグルドの舌を吸い、自分の気持ちよい部分に膣内のペニスを擦りつけるように腰をくねらせる。

「……ああっ、あの凛々しかったエクリシア様があんなに自分から……」

「……はあはあはあっ、……す、凄い……」

すでにエルフに対する崇拝の念を失った村人たちの数人は、そんなエクリシアの痴態を見ながら男性器を握り自慰をはじめていた。男たちの視線が全身にへばりついてくる。

――ああっ……な、なんなの……この気持ち……。

常に賞賛の視線しか浴びてこなかった。しかし今自分に向けられているのは、失望と欲情が入り混じった澱のような妄執だ。

「あああっ……みないでえっ……こんなっ、こんなわたしを……みないでえっ……」

無数の男たちに取り囲まれながら犯されている現実が、マゾの炎となってエルフ姫の女体を熱く燃え上がらせる。意識が更に混濁し、凛々しかった碧眼が焦点を失う。中年男との交わりがますます貪婪なものになっていく。

「処女だった癖にやりおるわ。この淫乱エルフが」

この濃密な状況にグルドの興奮も最高潮に達したようだ。ねちっこかった腰の動きが急変する。

パンパンパンパンパンっ！

両手でガッチリと女の腰を固定したまま、エクリシアの臀部に巨大な下腹を叩きつけはじめた。ウエストも太腿も幼少の頃よりの鍛錬で見事に引き締まっている。それだけにグルドの下腹を叩きつけられタムタムと弾む尻肉の丸みの動きは淫猥だった。そして真後ろからの衝撃で激しく躍る豊かな乳房が、獣欲を滾らせる男たちの視線を更に引き寄せる。

「ふはあああっ！　そんなふかいところまでへえええっ！　はへあっくうあああっっっ！」

膣壁をゴリゴリと擦られる快感が壮絶すぎて、もう呂律が回らない。舌や指の責めとは比較にならない肉悦に、エルフの象徴である長い耳がピンピンに真上を向いて痙攣していた。もうイキそうだ。エクリシアは愉悦の涙を流しながら、男の突入に合わせて上半身を激しく身悶えさせる。ただでさえ抜群の反応を示す女体が、絶頂直前の息みを見せながら

ペニスをきつく引き絞った。
「どうだ、人間様のチンポの味はっ！　気持ちいいっだろうがっ！　うおおおっ、このまま中に出すぞっ！　中にぶちまけてやるからなあああっ！」
その非情な宣言が、現実逃避し肉悦に溺れていたエルフ姫の意識を引き戻した。
「……ら、らめめえっ！　それだけはあっ！　そとにっそとにだしてへえええっっつっ！」
たとえ人間が相手でも子宮に種を注がれれば生命が宿る。エルフ姫は紫色のロングヘアを振り乱して叫んだ。しかし、男たちに責め抜かれた身体は初セックスの快感に溺れきっている。蜜壺の最深部からは熱い愛液を溢れさせ、膣襞たちは独立した生き物のように中の肉棒を捏ね上げる。
「うおおおっ！　エクリシアっ！　えくりしあああっっつっっっ！」
グルドがまるで痙攣するような小刻みな突入をした直後、膣内をギチギチに満たしていた男根がドグンと膨張し――。
ドギュドリュドブブッどぷどりどぐドグドグどぷぷぷぷぷっ！
身体の一番深い所に、マグマのような熱い粘液が直撃する。
「いややああああっっっ！　らめなのにいいっ！　らめえっらめなのにいっ！　なかだしらめなのにいっイっっいくううっイイいくううウウううっっっ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/